

「これからの梅原猛」：『人類哲学序説』（2013）を生誕百年に読み返す：

列島の縄文的世界観に根付いた仏教思想は、西洋近代哲学の蹉跌からの横超を許すか  
稲賀繁美 図書新聞 思考の隅景 連載 257 回 予定 version002, Mars 29, 2025

梅原猛は晩年『人類哲学序説』を残した。後世に委ねられたその展開を模索する会合が、生誕百年を記念して開催された。以下はその場で得た雑感の要旨となる。

哲学は普遍を志向するが、それが営まれる環境と無縁ではない。絶対神への信仰が沙漠地帯で生まれたなら、日本列島の風土には、特有の思考形態が育まれて不思議はない。山折哲雄はその鳥瞰を文字通り、上空からの観察に託す。高度 7 千メートルから見えるのは縄文の森林ばかり。千メートルまで降りて初めて水田稲作の弥生が視野に入る。都市文明がその姿を見せるのは高度五百メートル以下。この三層の重層構造は列島の生態学的な年輪に対応する。

換言すれば、国家としての営みは、列島の生態にとって、ごく表層の装いに過ぎない。そこに、棲息する民の心的構造を重ねればどうか。その心性の底には今なお分厚い縄文の堆積が潜み、ゲノム解析からは水田農耕以降の渡来民の遺伝子は上澄みの 25%ほどに相当する。無論、農耕生産とともに人口密度は桁違いに高まり、それはまた財産管理と連動して共同体間に殺傷沙汰の頻発を齎した。それでも欧州の牧場地帯が森林を開墾して小麦畠を拡大したのに

比べれば、山勝ちで湿潤なモンスーン地帯の島国では、里山の扇状地での稲作と里海での漁撈採取とが生活の基盤をなした。征服すべき自然ではなく、むしろ風水害を齎す自然への畏怖が、海幸・山幸の列島神話の基調をなす。これは牧畜の基本技術である去勢が玄界灘以東に根付かなかったという歴史的事実とも呼応する。

森林との共生あるいは汽水域の確保に基礎を置く生活の育む生活哲学が、西欧社会で展開を見た近代哲学とは、風土的条件を大きく異にしていたとしても、不思議ではあるまい。山極寿一は自然への加工に産業の基礎を見るロジャー・ベーコン、自然状態を万人の万人への闘争と仮定したトマス・ホッブス、その延長上に自然淘汰と生存競争の進化論を唱えたチャールズ・ダーウィン、その基礎付けとして、精神界から自然界を峻別し、物理法則の貫徹される領域に隔離したルネ・デカルトを、西洋近代哲学の「暴走」を決定づけた 4 名の元凶と指弾して憚らない。

梅原猛と同時代に京都大学人文研究所に在籍した梅棹忠夫は『文明の生態史観』を唱えた。そこに物産複合を上乗せして「文明の海洋史観」を説いた川勝平太は、長江文明の縄文の土壌への

伝播を仮定した安田喜憲を敷衍し、その複合に弥生的農耕の島国的特性を探る。

三名の論者はともに西方起源の哲学の基調をなす言語への過信に危惧を表明する。二重分節言語の獲得は、人類に生態系の支配者たる奢りを約束したが、本来の人間性の起源はむしろコトバ獲得以前の身体的「共感」の涵養にあったのでは？

それはアイヌの人々のカムイ信仰に今なお根づいて残存し、宮沢賢治が「鹿踊りの始まり」ほかで動植物との交歓のなかに蘇生させた世界観でもあっただろう。

東北は岩手出身の山折は、近年の気候変動で熊が冬眠しなくなった異常に触れた。温暖化が秋の食物不足と冬眠に必要な条件を奪っている。ヒトもまた電腦機器の跋扈とともに余暇と睡眠を奪われる。だが思うに冬ごもりの団欒と夜なべ仕事の農閑期こそが、文明を発芽させた。奥羽三山の即身成仏には、生死を超えた涅槃の境地が託される。円空佛の笑いが棟方志功の釈迦十大弟子と共鳴する。列島に浸透した仏教の哲理は融通無碍を是とし、中論の説く「肯定にして否定」「肯定にも否定にもあらず」の「両否」のレンマを許容した。そこに生態系の奥義、生命哲学の礎をも定位できようか。